

[シンポジウムⅡ]

中・東欧におけるフィールドワークから／を考える

松前 もゆる

この後に掲載される3名による報告は、去る2018年6月30日に東洋大学白山キャンパスにおいて開催されたシンポジウム「中・東欧におけるフィールドワークから／を考える」での発表にもとづくものである。

本シンポジウムを企画した背景には、近年、日本の研究者の間でも、複数の分野で中欧やバルカン地域を対象としたフィールドワークが実施され、その研究成果が蓄積されつつあるなかで、互いの方法論や視点、さらには経験知について共有し議論する機会があつてよいのではないかという思いがあつた。他方で、日本スラヴ学研究会のシンポジウムのテーマとしてフィールドワークをとりあげるのは、これまであまりなかった試みと言え、果たしてどのくらいの方が関心をもって参加して下さるかは未知数だった。しかし当日は、会員はもちろん、非会員の隣接分野・地域の研究者の方から一般の方々まで多数ご来場くださり、2本の講演と2つの報告に熱心に耳を傾けてくださった。中・東欧研究のなかでのフィールドワークとその可能性（および今後の課題）に対する関心の高さがうかがえた。ご登壇者および参加者の皆様に感謝を申し上げたい。

シンポジウムでの各発表内容の詳細については個々の報告に譲るとして、ここでは、シンポジウムの概要をまとめておく。

シンポジウムの概要

今回、シンポジウムのタイトルを「中・東欧におけるフィールドワークから／を考える」とした。これにはもちろん、「フィールドワークから考える」と「フィールドワークを考える」の双方が含意されている。

フィールドワークには、調査方法として、大きく分けて「仮説検証型」と「問題発見型」の2つの進め方があるが（佐川 2018: 234–235）、現場で多くの気づきを重ね、そこからより具体的な問いを見出して探求へと進む「問題発見型」フィールドワークはもちろんのこと、仮説を現地において常に検証しつつ研究を進める「仮説検証型」の場合も、研究上、フィールドワーク“から”考えることは不可欠である。

同様のことが、社会・文化人類学や地理学、生態学、植物学、地域研究といったさまざまな分野のフィールドワーカーが自らのフィールドワークの経験を発信・共有し

議論するために集ったグループ FENICS (Fieldworker's Experimental Network for Interdisciplinary CommuniatiOnS) が中心となって編んだ『フィールドの見方』では、「フィールドワーカーにとっては、フィールドこそが発見の宝庫、知の源泉である。」(増田・梶丸・椎野 2015: 5) と述べられている。それとともに、複数分野の研究者が執筆している同書においては、フィールドで「何」を「どのように」発見するのか、フィールドワークの対象と手法という「フィールドの見方」はフィールドワーカーによって異なり、「同じものを見ていても、見たいものが違えば、見方も変わってくる」(増田・梶丸・椎野 2015: 5) ことも指摘されている。

本シンポジウムでも、まず、文化人類学、言語学、フォークロアという学問分野および研究対象の異なるフィールドワーカーたちが、フィールドで何をどのように発見したのか、その過程についてご報告いただき、その経験や情報を交換し共有したいと考えた。

次に、後者の「フィールドワークを考える」についてであるが、例えば筆者が専門とする文化人類学では、古典的なフィールドワークとそれにもとづいてエスノグラフィを書くことへの批判が、1980-90年代頃から盛んになされてきた。なかでも1986年にアメリカで刊行された論集『文化を書く』(クリフォード・マーカス 1996) がもたらした衝撃は大きかったとされるが¹、そこで示された、フィールドワークとエスノグラフィという人類学的実践の根幹と言える営みが内包する非客観的側面や権力性をめぐるとの後の議論は、近年では内向的で停滞の時代であったと批判的に評価されることも多い。一方で、従来の学問的実践を超えるべく新たな試みが進められた時期との見方も示されている (cf. 佐川 2018、木村 2018)。

ただ、今回のシンポジウムに関して言えば、フィールドワークのあり方や記述のスタイルそれ自体を論じるというよりも、個々のフィールドワークとそれにもとづいて書く試みについて具体的にお話いただき、そこから中・東欧研究におけるフィールドワークの可能性と課題を考える方法をとった。そして、この後の個々の報告を読んでもいただければ、フィールドワークを通じて気づきを重ね、問いを発見するといったフィールドワーク“から”考える営みが、あらためてフィールドワークの対象やその進め方等、フィールドワーク“を”考えることにつながり、さらにそこから再びフィールドで考えるといった往還が生じていることがわかると思う。なお、今回はこうしたフィールドワークの過程を具体的に記述することに重きを置きたいという意図もあり、登壇者間で相談した結果、この後に続く個々の論考は、論文ではなく、シンポジウムでの発表内容にもとづく報告のかたちをとることとした。

各報告について

ではここで、当日のプログラムと個々の報告内容について簡単に紹介しておこう(なお、神原、菅井、松前の発表については、詳細は、本号に掲載された本人による報告をご参照いただきたい)。

講演①：神原ゆうこ「スロヴァキアの多文化地域における政治的文脈と文化人類学的調査の可能性：ハンガリー系マイノリティ居住地域のフィールドワークより」

報告者は2012年以降、スロヴァキアのハンガリー系マイノリティの調査を始め、当初はスロヴァキア語しか話せなかったこともあり、流暢なスロヴァキア語を話す各地のハンガリー系エリートへの聞き取りを中心にフィールドワークを進め、のちにハンガリー語がわかるようになって調査の幅を広げていった。その際、多くのハンガリー系はバイリンガルであるにもかかわらず、ハンガリー語を介して出会った人々とスロヴァキア語を介して出会った人々の違いを実感したという。本報告では、このようなフィールドワークの経験をもとに、マイノリティを取り巻く言語と政治、およびそのネットワークについての考察がなされた。

講演②：寺島憲治「『歌』を採る」

社会主義体制が崩壊した時、当の東欧諸国や日本でも、東欧革命とそれ以前、国家統治機構としての一党支配と複数政党制などについてはなばなく論じられた。しかし、報告者は現地調査を通じ、次のような問題意識を持つに至ったという。つまり、このような枠組みを作ると言説はおのずから筋書きができて調査者を拘束し、聞く方には耳触りがよくて分かりやすいが現実とはずれているのではないかと。そして、現実を出来る限り「生のままで」とらえるには、まず自らの「筋書き」を捨て去る必要があるだろう、その上で、このような「国家」、「地域」、「民族」などの枠組みを離れて「共同体」のなかで暮らし日常的に接触している人びとの視点から学んでみようと考え、いくつかの定点を拠点に活動を始めた。

今回の報告においては、この活動の一環として行われたブルガリア・ダヴィドコヴォ村での民衆歌謡採録作業をとりあげ、その前段階から文字テキストの形成にいたるまでの過程で浮かび上がってきた諸問題(伝承の場としての共同体と境界の流動性、採録テキストの文字化と解釈、「開かれた」テキストとしての民衆歌謡、等)に関する考察が示された。

研究報告①：菅井健太「ブルガリア語方言話者を訪ねて」

ブルガリア語は、本国以外でも、周辺の諸国を中心にブルガリア系住民によってマイノリティの言語として用いられている。報告者はこれまでルーマニアやモルドバにおいてマイノリティとして暮らすブルガリア系住民の言語を対象に、マジョリティの言語との接触から生じる言語面での影響や変化について、フィールドワークの調査にもとづいた研究を行っており、本発表では、これまでのフィールドワークの概要や成果、そして今後の課題や展望について報告がなされた。

研究報告②：松前もゆる「フィールドワークからどう描くか？——労働移動調査からの問題提起——」

中・東欧地域では、体制転換および（一部諸国の）EU加盟に伴い、西欧への労働移動が急増したが、報告者がフィールドワークを続けるブルガリアの村々からも、2007年のEU加盟前後からギリシアやイタリア、フランス、ドイツ等へ出稼ぎに行く人々が目立つようになったという。なかでも、移動先で主としてケア（介護）の仕事に従事する女性たちの出稼ぎは、「移動の女性化」の現れとして注目されるが、彼女たちはグローバル経済の「犠牲者」として描かれることもあれば、自ら選択する主体として描かれることもある。今回は、報告者のフィールドワークにもとづき、移動する人々を描く試みについての報告がなされた。

以上、今回のシンポジウムでは、学問分野や研究対象が異なるフィールドワーカーが、それぞれに「フィールドワークから考える」ことと「フィールドワークを考える」ことを繰り返しながら、「どのように」「何」を発見したのか、その過程が具体的に語られた。こうした互いの経験について情報交換・意見交換をすることで、新たな「フィールドの見方」を知ることができ、フィールドワークの可能性や今後の課題もまた見えてくると考える。ただ、当日は終了時間との関係で、十分な議論の時間をとることができなかった。その点を参加者の方々にお詫びを申し上げるとともに、このシンポジウムの記録をきっかけとして、さらに中・東欧地域におけるフィールドワークについての議論が深まることを期待したい。

注

¹ 無論、既に指摘されているように、『文化を書く』自体、それ以前の人類学の流れを受けたものであるし、一連の動きの象徴としてこの書名が用いられていると言える（cf. 木村 2018: 192）。

参照文献

- 木村周平. 2018. 「公共性」前川啓治ほか著『21世紀の文化人類学：世界の新しい捉え方』189-221. 東京：新曜社.
- クリフォード、ジェームズ・ジョージ・マーカス. 1996. 『文化を書く』春日直樹ほか訳. 東京：紀伊國屋書店.
- 佐川徹. 2018. 「フィールドワーク論」桑山敬己・綾部真雄（編著）『詳論 文化人類学』233-246. 京都：ミネルヴァ書房.
- 増田研・梶丸岳・椎野若菜（編）. 『フィールドの見方』100万人のフィールドワーカーシリーズ第2巻. 東京：古今書院.